

■ 編集だより

編集後記

精神科医の自己研鑽

筆者はいわゆる総合病院精神科のひとり医長なので、自分の専門分野に関しては、ぼんやりしているだけでは何も新しい情報が入ってこない。とはいつても毎日の勤務医生活の中で、新しい情報を何らかの経路で得ているはずである。しかし、どこから手に入れているのか自分でもはっきりしない。そこで、この点をもう少し整理して考えてみた。

現在、本学会誌の編集委員をしているので、この雑誌から情報を得ているのは間違いない。しかし、むかしからすべてを読んでいたとはとてもいえない。全体に内容がむずかしいものが多く、時間や気持ちに余裕のあるときに読んでいかないと理解しづらい。少なくとも診察の合間や昼休みにさっと読めるような内容ではない。学会誌というものはそういうものかもしれない。それでは、いくつかある商業誌ではどうであろうか。自分でも一誌定期購読し、職場の図書室でももう一誌購入してもらっている。これらの商業誌にはさすがに読みやすい論文（といっても研究論文よりも総説がほとんど）が揃っている。文献を網羅して客観的な書きぶりのものもあれば、著者個人の意見が強く出すぎているように感じるものもある。ただし、読む分には後者のほうがおもしろいが、さてどちらが勉強になるかは微妙である。

情けない話であるが、頭にどれくらい残っているかは別として、本で読むよりも講演会で講師から話を聞くほうが頭に入りやすい。筆者の周囲でも毎月いくつかの講演会が開かれている。これらの講演会は製薬会社の主催や後援によるものが多い。新薬の発売や適応症の拡大などがあると、関連する製薬会社は元気になる。講演会の情報は病院を訪問してくる MR さんがすぐに教えてくれる。全国から大学の教官クラスの先生が講演に来られる上に、無料で聞けるとなれば参加しない手はない。ただし、内容については利益相反の問題があり、その分を引き算して評価しなければならない。残念であるが、どこまで引き算すればよいかは聞き手にはわからない。なにせ講演する人以上の知識は聞き手にはないのだから。講演会では同業の精神科医と会えて、雑談で様々な情報を得ることができるという副次的な利益もある。もちろん内容は口コミなので真偽半々である。

さて最後は学会である。学会は研究の発表をする場であるだけでなく、専門医制度の始まりとともに、とみに教育的なプログラムも増えてきている。講演は講師が入念に用意し吟味しており、意見の偏りも少なく内容も正確である。ただし、学会に参加するためにはまとめて休みを取らなければならないし、旅費や参加費もかかる。そのため、どうせ参加するとなれば朝一番から最後のプログラムまで聞き通したいところであるが、そうするとくたびれてしまって話が頭に入っていない。しかし、そもそも学会というのは、同業者同士の親睦を高めるという意味も大きい。たくさん精神科医が集まるといってもお祭りだと考えれば悪くない。

とはいえ、いったい雑誌とか学会とか、もう IT 化された現代ではすでに時代遅れのフォーマットなのではないか。参加者が1万人近くになってしまうと、一度にたくさんの方が集まってみな同じ話を聞くという形式はもう限界である。10年後も現在のような学会のスタイルが続いているとは思えないし、思いたくもない。学会の講演には参加できなくても、あとから聞けるように e-ラーニングにすればよい。また同じように冊子体の学会誌というのも、いかにも旧時代の紙文化のなごりのように思える。国際誌ではホームページ上で検索や参照がしやすい書式で論文が掲載されている。若者はそれをタブレットで読むのであろう。英語のみだが論文をモバイルなどから音声で聞けるサービスもある。

そんな不埒なことを、少しは新しい知識を得ようとしているが出不精なロートル精神科医は考えるのである。

仙波純一